

国際協力に携わるNGO（非政府組織）の市民ボランティアと学生による意見交換会が7月31日、茨城大学人文学部（水戸市文京2丁目）で開かれた。同学部人文コミュニケーション学科、金本節子教授が担当する講義の一環。金本教授は12年前から県内のNGO組織と連携し、学生たちに国際協力の現場の声を伝える講義を続けている。国籍や言語、文化などの異なる人々が共存する地域社会で、求められる国際協力や交流について、活発に議論が展開された。

茨城大講義に現場の声 国際協力 意見交換

同日は全15回の講義の最終日。これまでの報告者であり、フィリピン▽ガーナ▽エチオピア▽バングラデシュ▽モンゴル▽ラオスの6カ国で活動するボランティアが参加し、学生の質問に答え

た。国際協力や交流活動で若者に何ができるかという率直な問いに対して、参加したボランティアは自身の経験談を交えながら「一步を踏み出す」「考える力を養う」「留学生との付き合いを深く」となどと助言した。

この講義は12年前にスタート。国際協力の現場で活躍するボランティアから異文化コミュニケーションを学ぼうと、「NGO茨城の会」の小野瀬武康事務局長らの協力を得て続けてきた。金本教

多文化共生考え12年



講義では市民ボランティアの生の声が学生に伝えられた＝水戸市文京の茨城大学

授は「当時は市民ボランティアが登壇することは新しく、手探り状態。一緒に成長してきた」と振り返る。学生にも浸透し、受講生は年々増えているという。本年度は学生のほか、社会人6人、外国人留学生10人を含む計65人が参加。小野瀬事務局長は「流れが変わった。学生とのやりとりは感動の連続」と手応えを語る。

ボランティアからの学生へのメッセージに加え、多文化が共生する地域社会の中で、どんな国際協力や交流ができるかについて、貴重なヒントもあつた。

モンゴル緑化日本協会の吉澤智也さんは「事実と真実は違う。事実を見極めるため、自分の目で見て肌で感じ、経験して考える。自満足で終わらないように、いつも原点に返っている」と学生に語り掛けた。

青年海外協力隊員としてガーナで活動し、現在は水戸市国際交流センター職員の加藤雅春さんは「簡単な優しい日本語」を使うことを提案。「大丈夫ですか」と大まかな問いではなく、「ごはんは食べましたか」「昨夜眠れましたか」などと具体的に尋ねることの大切さを説いた。

その上で「外国人だけでなく、日本人同士のコミュニケーションにも活用できる。多文化共生を（違った角度から）ゆっくりに考えると、他の部分でも役に立つことがあると気付き、広がるのでは」と話した。（平野有紀）